

議事録（平成27年度第2回糸魚川市総合教育会議）

糸魚川市総務部総務課

日	平成27年8月10日(月)	時間	14:00~15:42	場所	糸魚川市民会館会議室
件名	議事 (1) 学校教育における課題について (2) 教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱について				
出席者	【出席者】 16人 市長 米田 徹 教育委員会 佐藤英尊（教育委員長） 藤浪美香（教育委員長職務代理者） 永野雅美（教育委員） 楠田昌樹（教育委員） 竹田正光（教育長） （事務局） 総務部 金子裕彦（総務部長） 岩崎良之（総務課長） 井川賢一（総務課長補佐） 仲谷充史（総務課行政係長） 教育委員会 竹之内豊（教育次長・こども課長） 山本 修（こども教育課長） 佐々木繁雄（生涯学習課長） 木島 勉（文化振興課長補佐） 磯野 豊（こども課長補佐） 両川和宏（こども課管理係長） 【欠席者】 0人 (敬称略)				
	傍聴者定員	20人	傍聴者数	1人	

会議要旨

<p>1 開会 (14:00)</p> <p>2 市長あいさつ 今日、前回から持ち越しになっている「学校教育における課題」について協議した後に、「教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱」について協議、調整させていただきたい。 なお、大綱については、できれば、今日の会議で方向性をとりまとめた。</p> <p>3 教育委員長あいさつ 大綱の策定に取り組んでいるところであるが、大綱は、総体を示すと同時に、糸魚川市の教育の根幹を表すものである。大綱の策定にあたっては、大綱と具体的な取組との間に、常に脈絡が取られていなければならないことを念頭に置きながら、協議していく必要がある。</p> <p>4 議事 ※進行 市長 (1) 学校教育における課題について ○市長 前回の総合教育会議でも話をさせていただいたが、本当に学べる環境、楽しく学べるような環境づくりが大事という観点から、「いじめ」は根絶していきたい。</p>

これからの少子化、そして人口減少の中、学力の向上というのは、学校教育の中においては大きなウェイトを占める。

そのために取り組んでいるのが、「0歳から18歳までの子ども一貫教育」である。

○委員長

学校制度ができてから長い期間が経過しているが、機能の制度的な疲労があるように感じる。このことが、現在の学校における課題の原因を作り出しているのではないかと思う。

一貫教育を進めているが、一貫するということが、今ほど難しい世の中はないのではないか。例えば「いじめ」のような問題についても、親同士や先生、地域の人たちも含めて、同一歩調で子どもたちに臨むことができるのか、できないのか。一貫というのは、同一歩調を取っていくという部分があるということを基底に持つ必要があると思う。

○市長

時代が進み、文化的な社会になったが、学校では、いじめや登校拒否などの問題が起きている。何かが機能しなくなっている部分があるのではないか。皆さんも気づいておられると思うが、それが何かということがわからないから、常に問題が起きているという現状ではないかと思う。

○委員長

もともと学校というのは、集団教育を行う場である。その中で、個の尊重は当然あって然るべきだが、その個の尊重という意味合いと、集団を形成するということがうまくマッチしていない。

リーダーになり得る子どもが、能力を発揮できない集団の動向になっているのではないか。リーダーが、リーダーシップを取ることで、集団の機能が高まると思うが、そのあたりが個の尊重と結びついているからか、集団としての形がなかなか育たないという現実があるのではないか。

○教育長

一貫教育を推進していくことが、今、重要になってきているのではないかという気がする。

市民総ぐるみでというのは、学校、園、家庭、地域、それぞれの分野で、どれだけのことができるかという点で、今、その人たちに対する再教育が行われている状況でないか。

取り組んで5年経つが、学校の中で評価されつつある。地域とのつながりが強くなり、子どもたちを見てくれる人たちが増えているといった声から考えると、一貫教育の推進は、非常に重要である。

○委員

昔との違いというのは、人と人との身近なつながりが薄くなってきていることだと感じる。それは、やはりよく言われるネット社会、話をしなくても、第三者や何も知らない人たちとコミュニケーションを取ることができる。その弊害が今に及んで、影響が出てきているのではないか。糸魚川は、顔と顔を合わせて話をする、地域ぐるみで声かけをすることなどができる地域と思う。

誰もが、幸せになるために生きていると思うが、幸せに行きつくには、人を蹴落とすのではなく、人とつながりながら、相手のことを思いやりながらということが、最終的に、自分の幸せに返ってくると思う。そういうところを、子どもたちにもわかってもらいたい。

○委員長職務代理

人を蹴落とさないで、一緒に背中を押しながら押されながら、競争し合って、もまれることは、すごく大切だと思う。そういった競争心がなくなって、集団の中で平等に、輪番にということなどの積み重ねで、今のようになってきたのではないかと感じる。

前回、モチベーションが上がらないという話があった。日々の積み重ねの小さなところから、達成感をたくさん味わったりすることで、少しずつ満たされていく、満足感を得ていくということが大事でないか。また、幼児期から、人としての生き方の基本、あいさつする、マナーを守る、人がいやなことはしないなど、基本的なことをしっかりできるようにしていかなければならない。気持ちが満たされていけば、いじめをするとかといった気持ちも起きなくなるのではないか。

○委員

PTAという言葉は、Parent-Teacher Association だが、今はPTCAと言って、Communityが入って、地域の人たちと一緒にという活動が行われるようになってきている。

○市長

子どもたちが少なくなってきたからこそ、逆にもっと、糸魚川らしさの学び方なり、教育の仕方があるのではないか。少なくなれば、なおさらコミュニケーションが取れるのかなとも感じる。

今は、ネット社会で、例えば、ニュースに対する投稿を見て、あたかも、全体の考えとして受け止めるようなところがあるが、危険なところがある。

コミュニケーションは大事である。もっとコミュニケーションを取るべきである。教育の中でもそうだし、先生と保護者であったりもするが、それがあまりないと、溝ができてしまう。

○教育長

子どもたちに、どれだけ大勢の人たちと接する機会を作れるだろうか。それによってどれだけの影響を受けられるだろうか。それが、子どもたちの成長に大きく関わっていくのだと思う。

○委員

前回、いじめ問題の対処の仕方、発想を転換して、いじめができないくらい忙しくすればよいというような話があったが、もう少し詳しく聞きたい。

○市長

一例として、宿題を出すのがよいのではないかと感じたことがあった。宿題を通して、きちんとやってくる子の家庭、やっこない子の家庭の違いが見えてくるのではないか。宿題は、保護者の支援が必要となる。そういった宿題の出し方というものもあるのではないかと思った。

○委員長

宿題は必要だと思うが、ノルマ的なものでなく、子どもたちが喜んで取り組むものが望ましい。

また、宿題は多く出してもよいが、それを先生がちゃんと見て、評価をしてあげなければならない。子どもたちはそれを見て、一生懸命やった甲斐があったというような満足感を得る。そんなことが、一つのサイクルで生まれていくと、有益なものになっていくのだろうと思う。

○市長

宿題から得る家庭環境などを受け止めながら、家庭に対応していけば、家庭と学校との間が、スムーズになっていける部分があるのではないか。

○委員

生徒、児童が、家庭学習をちゃんとやっていけば宿題はいらない。それがないから宿題がある。家庭学習をやっている子とやっていない子とでは、どんどん差が開いていってしまう。

○教育長

宿題は、どちらかという受け身の子を作ってしまう。したがって、一貫教育の中では、この学年は何分といったやり方で、現在動いている。

自主性、やる気を出すための一つの行政の動きとして、英語検定や数学検定などの補助制度を設けている。そういう中から、主体性を導き出していきたいという流れである。

○市長

子どもの学力の差を埋める手立てが、何かないか。それには、家庭環境に手を入れていかなければならないかもしれない。教育環境の中でも対応しなければならない。また行政として、例えば、公的な塾みたいなものはどうだろうか。放課後児童クラブを勉強の場にするなどはどうか。

○委員

この間の新聞に、公民館を開放して、寺子屋みたいなものをやっている記事が出ていた。

○市長

教員のOBの皆さんから応援してもらえれば、空いている施設を利用して、学校ではできない部分について少し対応できないか。放課後児童クラブの課題を見ていて、そう感じた。

○委員長

学校週5日制の始まりのときに、地域の教育力にすぎろうということがあった。いろいろな特殊技能を持った方をお願いして、いろいろな所に子どもたちを所属させるなど工夫したことがあった。結果的に定着しなかったが、そのことが底辺にあって、今につながっているかもしれない。

○市長

学びたいものを学ばせてあげられるようなシステム、また両親が働いていて、その間家に帰ってもいないというあたりを踏まえて検討できないか。指導体制の課題があるが、やるからには、全市をあげて取り組みたいと考えている。

このような取組が、学力の向上につながればと思っている。また、この取組により、コミュニティがうまくいって、いじめの減少につながればよい。今は長寿社会で、皆さんが長く活躍される状況になっているので、人材をうまく活かすこともできればと思っている。

(2) 教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱について

資料「糸魚川市教育大綱（素案）」について、事務局が説明。

○教育長

4ページは0歳から18歳まで、5ページはそれ以降というとらえ方でよいか。

○事務局

そのような考えで、提示させていただいている。

○委員長

「わが いといがわ」だが、ここで表現されているのは「わが」で半角を置いて「いといがわ」になっている。そうではなくて「わがいといがわ」は、最初から読んでも最後から読んでも「わがいといがわ」。「わがいといがわ」が意味するのは何なのか、あまり明確ではないが、「糸魚川を自分のものとする」、そういう意味合いの「わがいといがわ」になるのかなと思う。

田中統治先生がせっかく発見してくださったので、一つのサークルのような感じで「わがいといがわ」に、もっと意味を持たせることができないか。

一種シンボライズされた一つのキャッチフレーズにもなる可能性がある。

○市長

例えば「輪」のいといがわでもあるし、和みの「和」のいといがわである。キャッチフレーズとして使えると思うし、キャッチフレーズが視覚により頭の中に入ってきて、残るといえるのは大事である。田中先生のように、あれだけ大きく言っていただくと受け止めやすい。

○委員長

4ページの重点推進項目の中で、「学力の向上」が筆頭に上がっているが、学力の定義をしっかりとしておく必要がある。

人間の能力すべてを学力ととらえる考え方もあるが、学力というのは、今までの古い学力観、つまり勉強ができるとか、できないとかいう意味合いでの学力ということで、もう少ししっかりとらえておく必要がある。

何かができれば、それをその子の学力だと、幅広く、グローバルにとらえていく考え方もあるので、ここで言う学力とは、標準的な学力という意味合いで意識を共有しておく必要がある。

○市長

大綱の中で、しっかりとした考えを示しておきたい。

○委員長

学力のとらえ方だが、偏差値によって振り分けられている現状にある。本当はそうではなくて、それぞれの学校が、存在感のある学校として存続していたように思うが、平準化しようとして、逆に序列を作ってしまった。

特に高等学校では、生徒数の確保を危機的に感じている学校もあると聞いている。偏差値による振り分けがあるのなら、入学できるように努力するというようなことがあってもよいのではないか。それは、非常に素朴な、昔ながらの学力観に基づいた考え方である。

○市長

今の高等学校のとらえ方としては、生徒数が減ってきたという数だけで判断をしている部分がある。やはり、特色のある「この学校の目的は何か」と明確にしているところは、県として、小規模校であっても残す考えである。要するに、教育理念をしっかりと持っているところは残すという方向にあるが、そういうものがない場合は、数として整理していきたいということである。

学校としては何をすべきか、自分たちの目的なり、考え方をしっかりとしていかなければならないのではないかと。高等学校になると、よりそれらを求められてくるのではないかと思う。

○委員長

もう一点、前にも教育長と話し合ったことがあるが、小学校段階の学力評価と中学校段階の学力評価が、かけ離れている。

小学校では、絶対性を加味した相対評価で、通知表は、本人を励ますような形で作られているが、本当にその子がどういう客観的な学力を身につけているのかというのが見えにくい。

それが、中学校に入った途端、客観的な評価基準で見られていくことから、そこに大きなギャップが生まれる。中1ギャップは、そういう意味合いのギャップも影響している気がする。

一貫性が標榜されているわけなので、評価という問題についてもメスを入れて、学校の研修、つまりすべての学校から集まっていただく機会に、もう少し論議をして、糸魚川市独自の一貫性をうまくスライドしていけるような何かを作り上げて行く必要がある。

○市長

一貫教育の中で、そのあたりの是正についても考えていかなければならない。

○教育長

これまでの一貫性というのは、評価の部分でなくて、評価につながる教育課程の分野、つまり、何年生と何年生のつながりをどうやっていくかということに主眼を置いてきている。

それがつながってくれば、自然と評価についても考えていかなければならなくなる。そういう流れになるのではないかと。

○市 長

この中で、糸魚川らしさが入っているというのが、5ページの「糸魚川ジオ学（ふるさと学習）の推進」ということになるが、これは、よろしいか。

○委員長

これは素晴らしい。ぜひ徹底的に推進したほうがよい。

○教育長

「糸魚川ジオ学（ふるさと学習）」であるが、昨年度、一貫教育方針の見直しを行った。今年、基本計画の策定に入っているが、基本計画の策定には、4ページの取組指針の「②健康・心・学力のバランスの取れたこどもに育てる」の中の3点については、一貫教育方針の基本計画の中に取り入れていく。また、これに付随して、「ジオ学」「キャリア教育」「特別支援教育」がある。加えてもらいたい

「ジオ学」は、0歳から18歳まででも重要であるし、学校教育そのものを支えているわけだから、大人になってからの部分だけでなく、4ページにも「ジオ学」を重ねて書いた方がよい。

○委員長

道徳の教科化が進められているが、いずれ教科化されるときに、道徳教育の今までの在り方と大きく違えていく部分があると思う。これは、「ジオ学」に関わりがあるが、「ジオ学」は、これまでどちらかというと、特定の人物に沿った「ジオ学」をやるということがあまり実践されていない。

この郷土には、御風先生をはじめ、あまたの文化人を輩出している。「ジオ学」を通して、これらの人たちが勉強するというような特色のある道徳教育の進め方、つまり人生学習であるが、これは「キャリア教育」にもつながる。道徳の教科化に、「ジオ学」を絡めていくということである。

ここでは、特に徳育について言及されていないが、そのとらえ方をしておく必要がある。

もう一点、5ページの重点推進項目に「生涯を通じた健康の保持増進、体力の向上」というのがあるが、アレルギー体質や、風邪をひきやすい、熱を出しやすいなど、子どもたちを見ても、体力的に変化してきているように感じる。それが食物、環境、生活環境、そういうものも大きく影響しているのではないかという気がする。根本的に、食、住環境から見直しが必要でないか。非常にスパンの長い取組になるかもしれないが、課題に設定して解決していく必要がある。

○市 長

今の徳育にしろ、住環境や食に対して、非常に変化している部分がある。その中でも、特に「ジオ学」の中に入ってきてもいいかなと思っているのが食育である。この地域に住んでいるからこそ、健康だということへ持っていければよい。給食の目的は、そういうところにあるのではないか。

○委員長職務代理

今、「ジオ学」がいろいろなところでやられていて、「愛着だ」と言うが、学ぶだけで、その先に進んでいないように感じる。愛着を持たせるためには、今の食育の話のように、地元の農作業に関わったり、地元の祭りにもっと密に関わらせて、自分たちが伝えていかなければならないという意識を持たせるなどの取組が必要である。

○市 長

大地の恵みが、食育にもつながっていくと、当然受け止められる。大切なことである。

○教育長

「まるごと糸魚川」というよい資料がある。小学校3年生から中学3年生までに配布する資料があつて、その中に人物もすべて載っている。

○委員長職務代理

「ジオ学」は、0歳から18歳の部分においても、とても大事だと思う。

○教育長

受け取り方によっては、「ジオ学」であるとか、「キャリア教育」とか、「特別支援教育」というとらえ方をするのだが、文言に出ていないと、それが見えなくなってしまう。

○市長

それともう一点、大綱に盛り込みたいと思うのは、コミュニティである。

○委員長

コミュニティは、かつてあった。なぜ崩れたかということが、あまり分析的にとらえられないまま、今、コミュニティを再編しなければならない。

活動としては、コミュニティらしきことをやっているのはあるが、コミュニティを形成していくという方向性を持つことは必要だと思う。

○市長

このIT社会において、コミュニケーションについては、子どもたちも言葉に出して大事だと認めている。でも、現実的に機能しているかということ、逆に後退しているかもしれない。

○教育長

形式的なやり取りの部分も、コミュニケーションというとらえ方でいいのかどうかというところだと思う。やはり、心と心を打ち明けながら、いろいろなことについて話ができるかどうか。そこまで人間関係ができるかどうかということではないか。

○市長

子どもたちにもいるが、人と話すのが嫌だというのは心配である。学校ときはそれでよいかもしれないが、社会に出てからどうするのか。

社会の中では、当然、非行に走るなど、それこそ不幸なことである。できれば早い時期に軌道修正して、仲間に加わることによって、社会に出て行ってもやっていけるようにしてもらいたい。

○委員

ネット社会の弊害で、子どもたちは、顔が見えないと好きなことが言える。顔を見ると、一対一で話ができない。機械を通してではなく、人と人とのつながりが大事である。

○委員長

コミュニケーション能力を高めると言っている学校は多くある。

子どもたちは、総合学習を通してプレゼンテーションの能力は非常に高まっている。

これは、大人になっても力として付いていっているというのは、若い人たちの様子を見ていればわかる。小学校の段階から非常に機会を与えられているし、練り上げられたものだと思う。

しかし、コミュニケーション、真剣さを伴った語り合いというのは、それほど多くはない気がする。どんな機会に、どんなやり方で、コミュニケーションの力を付けていくかというあたりを研究する必要がある

○市長

海外派遣に行ってきた子どもたちを見ていると、行く前は学校単位となっているが、帰って来ると和気あいあいとしてくる。やはり4泊5日の中で、しっかりコミュニケーションが取れてくる。

やり方によっては、そういうことができると思う。教育が必要である。

○委員長

コミュニケーションが発生するというのは、共有する何かをそこに見つけ出したときである。共有するものがないのに、コミュニケーションだけが成立するのはまずあり得ない。その共有するものが何なのかというところを掘り下げていけば、教育の機会がそこに生まれてくると思う。

そういう機会を積み上げていけば、当然コミュニケーション能力はできてくる。最初は相対する一対一の状況だが、グルーピングの中でやっていくということも、過程として生まれるだろう。

○市長

同じ学校の中では生じないかもしれないが、同じ目的を持った人たちが集まれば、非常に早くコミュニケーションが取れるようになる。例えば、放課後児童クラブのような学校の枠を越えての場所はどうか。いろいろなものが組み込めるのではないかという気がする。

簡単には解決できない課題も多いが、まずは理想的な形を作っておいて、それに向かってやれるもの、やれないものを考えていくのが大切ではないかと思う。

○委員長

読書について位置づけてもらいたい。「ジオ学」につなげてよいし、学力につなげてよいが、もっと心の活動だとか、そういったようなことがあってもよい。

読書が廃れたと一般的には言われるが、本の持っている価値は全然廃れていない。むしろ今だからこそ、読書をきちんと薦めていくということが、一貫教育を支えるかもしれない。

○市長

本の果たす役割は、大事である。

また、「その町の文化は絵本にある」と言われるくらい、絵本の重要性というのがある。絵本というのは、物心つかない子どもたちが判断をできる本である。判断し、頭の中で想像するという優れたツールである。教育の中においても、重要な位置づけが必要である。

○教育長

子どもの読書推進活動計画を今年度中に策定する方向で進んでいる。

各学校においても、読書の時間というのは重要視されている。朝読書であるとか、とにかく毎日、本に親しむような時間帯は設定してあって、日課表の中にもきちんと出できていると思う。

○委員

いろいろな学校で、読み聞かせに力を入れている状況である。

○委員長

読み聞かせは、本当に大事である。

○教育長

生まれてすぐ、母親に抱かれながら、母親の声を聞きながら、それが絵本だったり、本当に簡単なもの、それでも、子どもに与える影響は全然違う。読んであげるという行為が、愛そのものだというとらえ方で、人間の心に訴えるというのが読み聞かせだということである。

○委員長

読み聞かせの思い出として、かつて、先生の情に触れるといったことがあった。

○市長

読み聞かせは、子どもの人間形成において重要なところだと思う。教育の中でも、やはり位置づけは大事かと思うので、読書については、大綱の中にしっかりと位置づけさせてもらいたい。

○事務局

提言をいただく中で、「4 教育の基本方向」で、1 番目が0歳から18歳まで、2番目が18歳以降と言ったが、2番目については、糸魚川ジオ学であったり、健康や芸術、スポーツなど、一生にまたがる問題なので、これがベースになる中で、特に0歳から18歳は、教育の中で強化する部分として出す形の方がよいと考える。

また、課題の中にも「子どもの読書習慣の定着」とか「家庭教育、地域教育力の向上」というのが載っているので、2番目の方はベースとして、一生涯のものとしてとらえたほうがよいと思う。そうしたことを踏まえながら、事務局で今日いただいた提言を検討させていただきたい。

○市長

これまで出していたいただいた提言を案の中に取り入れ、大綱をまとめていく。

5 その他

今回は、10月14日(水)の午後2時から、市民会館3階会議室で開催する。

6 閉会 (閉会 15:42)